アルハンブラの思い出

明治大学政治経済学部 特任教授／
元ベナン共和国駐箚日本国特命全権大使
小西 淳文

東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第15回は、国際協力機構：JICA在任中よりたびたび東京フィルの演奏会に来場され、パートナー会員としてもご支援くださっている小西淳文様。2016年から2020年までベナン共和国駐箚日本国特命全権大使としても活躍されました。ご自身のギター演奏や、ベナン共和国赴任直前に来場されたコンサートでの思い出を綴ってくださいました。

田舎育ちのスポーツ少年だった私は、クラシック音楽が好きで、中学生になって通信教育でクラシックギターを学びました。夢は「アルハンブラの思い出」を弾けるようになること。それから15年が経ち、新婚時代に家内とアルハンブラ宮殿を旅した時の私のはしゃぎようは異常だったそうです。城壁の中で、ようやく弾けるようになった曲を弾ければ良かったのですが、それはかないませんでした。なぜか?って。

実は、二人の結婚披露宴で、ショパンのノクターンを家内のピアノ、私のギターのアンサンブルで演奏したのですが、ギターの弦が突然切れて、私は真っ青に！ 家内はソロで演奏を続けましたが、あとで、母から「あんな恥ずかしい思いをしたことはない」と激怒され、ギターを取り上げられるといった大失態をしてしまっていたからです。トホホ。

そうそう、演奏中に弦が切れる!!　東京フィルハーモニーの定期演奏会で、第1ヴァイオリンの2列目の演奏者が突然、自分のヴァイオリンを3列目の演奏者に渡し、替わりに3列目の演奏者のヴァイオリンを手にし、演奏を続ける中、同じようにして次々とヴァイオリンの交換が行われ、弦が切れたであろう第2演奏者のヴァイオリンを手にした最後列の演奏者が舞台裏に消えていきました。しばらくして、彼は弦を張り直したヴァイオリンを手に戻ってきて、先ほどとは逆の方向にヴァイオリンの交換が次々とおこなわれました。このような珍しい光景を目にすることはコンサートホールでないと経験できません。

ベナン共和国ウィダー市の教会

ある定期演奏会で、ノルウェーのオペラ歌手ベリト・ゾルセットの北欧の青空のような澄み切ったソプラノが素晴らしく、翌日フランス人教師に、昨日のノルウェー人オペラ歌手は最高に素晴らしかったと話したところ、「なぜ、イタリアやフランスではないの？」と訊かれて、「だって、ペール・ギュントを作曲したのはノルウェーの作曲家、グリーグだったもの」と答えたところ、彼女は「なるほど」とうなずいていました。

ダホメ王国（現ベナン共和国）独立闘争時の王様だったベハンジンの銅像

自分でコンサートチケットを買うとなると、好きな曲や演奏家に偏ってしまうのですが、定期演奏会では、新たな曲や指揮者、演奏家に触れることができ、新しい発見がいつもあり、感激・感謝至極です。皆様にも会員になられることをお勧めしたいです。

小西淳文（こにし・きよふみ）
1983年東京大学文学部社会学科卒業後、国際協力事業団（現：国際協力機構：JICA）入団。JICAセネガル事務所長、上級審議役等を経て、2016年ベナン共和国駐箚日本国特命全権大使を拝命。2021年4月から明治大学政治経済学部特任教授として勤務中。